

直参旗本大嶋侯麗姫『るい殿』抄書

朗読劇 るい姫 伝説

作 後藤正敏 脚色音楽効果 大嶋樹美江 朗読 虫鹿真智子

毎年それは決まっています、善光寺「へちま加持かじの行事」中秋の明月の朝のことです。
あります。うら若き一人の才媛じじょ、侍女二人を共に初老の乳母うばの手を引き静かに階段をのぼる姿があります。その四人の会話が何やら楽しそうに少しずつ山門に伝わってくるのです。

穏やかなこの長い石段での光景は毎年同じように繰り返されていますが、この日を待ちに待っている者がいるとは誰も知りません。

この四人、当地を治める旗本、大嶋侯の息女、るい姫の一行である、界限では比喩に値するものが無いという位の文武兼備の美女であります、しかし、一つだけ気になる事があります、それは歳も頃なのに浮いた噂が一つもありません、屋敷にはそこそこ有望な若者たちもいるのですが、せいぜい時の挨拶を交わす程度しかないのであります。

お屋敷から、善光寺山門への道は、少し理由わけがあって遠回りの道なのでございます、屋敷を後に西にしばらく向かい、春日社の東玉垣沿いに南に進みます、そこから甚じん中山なかやまの前に出て静かな鎮守森の横を通り抜けるのであります、すると、突然右手に色鮮やかなまんじゅしゃげ曼珠沙華が一面に自生する小高い焼畑に出るのです、これを大きく西に迂回在郷五丁目の南にある大赤松の下まで来て調度中程で、およそ

八丁の道のりでございます。

ここから、東に新五丁目、西に六丁目の新町を横切り北の関川まで来ますと、吐と月橋げつばしという狭い土橋に出会います、ここを渡って繁華街の利右衛門町に出てくるのですが、ここは、るい殿の好きなまちなみで。やはりこの街の中心部、あらゆる品物が揃い、人の往来も激しく活気のある風景でございます。この街並みも横切り暫く北へ進みますと香積寺山門こうじゃくじに出会い、これを左に坂下町、弁慶庵べんけいあんを経てようよう善光寺山門にたどり着くのです。

この、曲がりくねった道、最近屋敷の誰かが取り決めた道筋で、幕府の政治改革で庶民生活の統制のさなか、理由は本町筋の商家の店先なので屋敷の者が品定めなど目立つ事は避けるようにと、るい殿は聞いているようです。

今日も終日善光寺は大賑わいで、るい姫一行、毎年のように、ためらいもなく阿弥陀様の前でそれとなくたたずんでいます。ここは戒壇かいだんと称し僧侶の修行の場所であります、この日に限り戒壇巡りと言う名目で一般の参拝者に内部を公開、阿弥陀の功德を得てもらうため開放しているようです。

いつものように、るい姫一行には特別案内役が付くのです、やはり武家の淑女連、間違いでもあるならば一大事、他の参拝者が戒壇の中に、いないのを確認、案内の僧侶が前後に付きます。今年は案内役が変わりなぜか大勢の僧侶の中、先頭案内役に若い『雲継』が選ばれたのです。雲継にとっては願ってもない、まさにこれぞ千載一遇つかの機会です、仏に支える身であることを忘れてしまったようです。

この戒壇は、本堂の地下を巧みに設計したもので修行僧のために外部からは絶対に光が入らないように工夫を凝らし、本堂建立と同時の施工であるようですが、確かな普請図などは残されていないと言います。

戒壇の真上は阿弥陀如来様が鎮座されていて、入り口は菩薩様の右横になり、少し頭を下げて階段を五段ほど下ったところから始まります。幅三尺ほどの板張りの狭い通路が^{まんじ}卍形の迷路となっており、とにかく、暗闇の世界で自分の指先すら見えない視界でございます。

仏門に仕える僧侶の修行の場で、この、闇の道をたどることにより心身を清め阿弥陀に導かれ必ず極楽に行けるという信仰から、特に、阿弥陀様の真下にある^{ぶっしょう}仏性の錠前に触れると幸運に恵まれ、願い事なども叶えられるという事が信じられているのでございます。

世に迷い壁に当たれば必ずここにきて修行するのです、座を組み無想の状態に入り幾時かすぎるといきなりこの闇の世界に一筋の光明が稲妻のごとくに上に鎮座する阿弥陀様から目前に落ちて来ます、すると瞬時ではありますが禅を組む正面に七寸位のはがねの錠前が板壁に掛っているのが闇の世界ではっきりと見えると言います。

この時、もはやすでに世上の煩惱が消え去り、不思議な現象が起きているのです。これは凡人には体験できる事ではありません、修行に修行を重ねた僧侶でしか体験できないのです。この錠前には鍵がありません、鍵は自身の心にあるもので錠前を

見ることが出来れば開いたも同然なのです、また、開けるにも扉がありません、単なる板壁に錠前が取り付けられているだけなので、これぞ深遠なる観行しんすい かんぎょうの世界というものかもしれないのでございます。

今日、るい姫の案内役を任される若い僧、『雲継』温厚な彼の生い立ちを語りたいのですが、残念ながら、修行僧以外、何もないのです、ただ、年齢もはっきりしない三歳くらいと思われる幼子おさなごが、ある秋の夕暮れ、庫裏くりの前でただ一人無言で、石のようにずしりと重い寂しさをもち立っていた、と言う事しか分からないのです、見かねて、しばらく預かることにしたお庫裏様も日がたち、困り果て、私、るい殿の乳母『千代』に相談して下さったのでございます。

名前も『雲継』として、幼い修業僧となったのでございますが、それ以前の履歴ははっきり致しておりせん。

それが、月日の経つのも早いもので今は立派な青年になり仏道に於いては誰にも引けを取らぬ僧徒そうととなったわけですが、それはもう、無類の無口である事と、笑顔などはまったく見たことが無いと言う事は誰もが知っているようでございます。

『秘法へちま加持』とは、へちまを春の終わりに境内の日当たりの良い場所に種をまき丹精込めて育てて、お加持の当日、夜も明けぬうちにへちまを取り入れ、さいのめに刻み、梵字ぼんじで書かれた和紙で包み祈禱をしていただき、参拝者たちは家に持ちかえり、人の踏まない清らかな土地を選び地中に埋めるのです、目

印に小石などを置き、毎朝初水をかけ、その捧げた水の一部を飲むのでございます、これを四十九日間続けると不思議なことにいろいろな願いごとが達成できるというのでございます。

雲継、今日の予感があったのか、昨夜丁寧^{ていねい}に丁寧^{ていはつ}に仕上げた剃髪、右こめかみの少し上を不覚にもうっすらと剃刀^{かみそり}の跡をつけてしまった、それが今、るい姫^まを目の当たりにして、なぜか、急にその辺りから血でも噴出さんばかりの心音と動揺が交錯しているのです。まず、雲継、袈裟^{けさ}の中に両手を入れ整ったところで、るい姫一行に、深い一礼をします、入り口から階段を五段ほど下りました、すぐ後ろに、るい姫がいます。このあたりで少し暗くなり、その先一間ほど、卍の部分にはいると何も見えなくなります、一行四人はもう手探りであるようです、中でも侍女の二人は暗闇の板壁を指を大きく広げなせているだけで前に進まない、さすが乳母のちよ殿はすぐ前にはいるはずのるい姫を気遣ってか非常事態の構えで眼つきも尋常ではないようです。

不謹慎ではあるが、一切の衆生^{しゅうじょう}を救護される阿弥陀如来、慈悲の化身^{けしん}とされる観音菩薩、勿体^{もったい}もなく毎日、向かい合いお勤めをしている雲継、仏の姿を見て常々美しい人だと思っていた、ところが今日このように、るい姫を目前にして何にも勝る実に美しい生き仏だと思うのです。

今ここに現実があるのです、雲継が何度も夢にした想いがここに現実としてあるのです、しかし、無情にも時は刻々と過ぎていき、少しずつ中央の戒壇に近づ

いて行きます、全くの闇の世界であるが、なんと、幾ら誰にも視えないと言え、雲継、るい姫と向かい合いあとずさり後退りで歩んでいるのです。るい殿、この戒壇巡り幾度か体験はしているようですが、中央、阿弥陀様の真下あたりにある願い事が叶えられると言う、錠前にはまだ一度も触れたことは無いようです。やはり、るい殿、今年は何か願い事があるようでございます。そのような内容の黙示が雲継に伝わってきていますが。るい姫にあっては何一つ不自由はないはず、すべてが揃っている、何であろう、あるとすれば一つだけ、意中の人がいるがままならない、おそらく想像も付かないほどの美男で長身、剣豪かもしれない、それとも学者か、学問は何であろう、そんな男が家臣に二人三人いると聞く。もう、これしかないと思い込んでしまった雲継、僧侶ではなくなっていた。一行はいよいよ錠前に近づいた、闇の中でこの、願いがかなえられるのは百人中せいぜい一人か二人。

不思議にもこの闇の中で、るい姫、後退りする雲継にぴたりとついて歩けるのは、雲継の袈裟の袖あたりに右手をわずかに添えていて、しかも、この上ない安堵と微笑みを見せている、雲継は冷静に冷静に、私のような名もない一介の僧、しかも自分の素性すら分からないという自分になんと、旗本の姫君がわずかではあるが私の袈裟に手を添え一緒に歩んでいるではないか。ついに、幸運の錠前がすぐ横に来た。ところが、るい姫の左手は触れるような位置にないのです、このままであるならばおそらく触れることはありません。触れることが出来なければ、あのきわだった家臣たちへの心配ごとも消え去るし、来年も再来年もこの日には逢

うことが出来る、なんと雲継このような浅ましい考えをしてしまった。しかし、その瞬間、我に返った、そのことよりも、今、るい姫に何をしてあげられるのか、何をるい姫は望んでいるのか、それは錠前に触れてもらう事ではないかと気づいた。その時、瞬間、阿弥陀様からピカッと光が届いた、勿論、雲継以外誰も知らないことである。とたんに、今まで体験のなかった^{もろもろ}諸々の煩惱が一気にかき消され時間が止まってしまった、これぞ、雲継、仏道の極まり寂滅^{じゃくめつ}というものか、迷いから抜け出し、この善光寺全体を飲み込むような深い呼吸にはいつている。ところが、るい姫錠前を通過しようとしている、あわてた雲継袈裟の中にあつた自分の両手を素早く出して、るい姫の左手を上下にそつと包み錠前に触れるように無言で案内した。瞬間ではあるが、るい姫、雲継同時に手を握り合い錠前に触れたわけであり雲継この時二十七歳であつた。るい姫も屋敷内で年一度開かれる、^{しないおおよせ}竹刀大仕合では多少殿方に触れることもあるが、このように優しく包まれたのは初めてである、しかしながら、うかつにも、るい姫に手を出した場合、護身術『^{てつせんりゅう}鐵渌流』の反射技に掛る恐れがあつたのに、無事だつたのは幸いでした。電光^{あいくち}石火の合口組み伏せ技は、無防備のように見せかけ、手など握られた場合、いちばん掛りやすく、小々大男でも反動と逆手により、ひっくり返し、組み伏せられ、^{さかて}刃渡り六寸、諸刃の直刀、茎の鑪目、逆さ鷹の羽、鞘は朱の金箔、砂子入り、^{もろは ちよくとう なかご やすりめ さか たか は さや しゅ きんぱく まさごい}柄は出し鮫皮、完璧なる鋭い関物が、るい姫の懐から出た瞬間、^{つか さめがわ せきもの こいくち}鯉口が切られ相手の首筋に冷やりと当たっているはずなのに。闇の世界、戒壇めぐりも出口ま

で後わずか最後の卍の角を曲がれば殆んど俗界、明るくなってきた。この闇の中の一巡は、るい姫、雲継、ほんの一時の時の流れであったが、二人の生涯を語る起点となる事とは誰も知らないわけでごさいます。最近、雲継に少し変化が見られます、それは、雲継の笑顔を初めて見たと関の街では話題になり、あのような無粋で、無感動な僧でもにっこりすれば結構いい男じゃないかと評判になっている。しかも、不思議なことに、このごろ、何となく行動に機敏性があり威風さを感じるようになったと皆はいう。

一方、るい姫と言えば、なぜか奥座敷にこもりがちで元気がないようである、何故であるかは不明である側近は皆、心配をしている、るい姫のすべてを知り尽くしている、乳母のちよ殿はどうかと言えはいっこうに心配なぞしていないこともまた、不思議なことである。やがて、歳も明け春麗らかなある朝、突然善光寺和尚『慈雲上人』が雲継に突然、「これからお屋敷まで行く、ついて来なはれ」と言う。和尚の京言葉は優しいが、仰天である、今まで慈雲上人以外お屋敷に入った者はいない、なぜか分からない、和尚の跡を気が進まぬ歩調でとぼとぼとついて行く道のを考えてみた、法要でもない、るい姫最近体調がすぐれないと聞いている、その見舞いかもしれない、ならばこの私のような僧が伺う立場でもないし、それとも、お屋敷前町あたりで、「雲継、このあたりで待ちなはれ」かもしれない、吐月橋を渡りきったあたりで大変な事を思い出した、去年の秋、るい様のあの優しい手に触れてしまった、気付かなかった、姫の手に触れた事の咎めとい

うことかもしれない。かりに、そうだとしたら破門は免れない、お屋敷と宗休寺(善光寺)とは深いつながりがある、武田信玄公が滅び、その重鎮であった広瀬利広様が大嶋家を頼り関村に逃れてきたのが始まりで、お屋敷の南、下九日町しもここぬかまちに住まいを与え、その後広瀬家が日吉に小庵こんりゅうを建立、大嶋家が広大な土地の提供し、あらゆる支援をし今に至っている。破門は雲継一人で済むが、そのような軽いものではない、この寺はどうなるのか、関村全体が揺れる、今まで育ててもらった和尚様、三歳のあの時からわが子同然に可愛がってくれた母ははさま、なんとお詫びを入れようか。櫓の御門をくぐり、なんと、お成りから奥座敷に通された、今まで見たこともない分厚い二連揚羽の家紋入り絹座布団が二つ用意されている。和尚さまが敷きなさいと進めるが、その状態ではない、ただ畳にへばりつきイグサの匂いを胸一杯に、ひれ伏すのみである。いろいろ回想する、るい姫の幼いころ、十五歳のころ、二十歳のころ、そして、あの半年前、るい様には錠前に触れて貰うべきであったのか、それとも。その事よりも、手に触れたことが問題なのか、こんきやく 困却の極まりである。しばらく、せいじゃく 静寂が続いたのち、襖の向こうで二三度の咳ばらいが聞こえてきた、襖は誰かの手によって滑るように開かれた、ああいよいよかと思った。いよいよ、殿のお出ましである、着座ののち、少し間をおいて長めの時の挨拶が和尚さまと交わされている、雲継は和尚の斜め後ろ九尺ほどの位置であるが、不思議なのはそのまた後ろ九尺程に、るい様らしき人が同席している、これは何となく感で伝わってくる。しばしの時が流れ、いきなり、まだ、ひ

れ伏している雲継に、殿が『そちが、雲継殿であるか』とやや大きめな声が届いた。また一段とひれ伏す雲継に、『楽にして、もう少し寄せぬか』と、言われ少し前が出るが、後ろにいる、るい姫も少し前が出る、おかしなことだと思った。次の言葉によって雲継の定め^{ぬぐ}のすべてが決まるわけで、時には木枯らしの吹く寒い日にどこかの村はずれの地蔵堂で膝を抱え、ほほを伝う涙を薄汚れた手で拭わねばならぬかも、また、時には橋の下に床を作り寒空の星を眺めなければならぬ事もある、それはいい方、手討ちと言う事かもしれないと最悪を考え深い息を一杯吸い込んだ。殿が声を和らげ『湯島の昌平坂を知っておるか』と余りにも唐突な言葉が来て、雲継『はっ』と言って、知ってはいたが返事が出来なかった。昌平坂とは幕府の学問所でここへ入ることが出来る者は限られている、藩主、旗本の子息、または家臣で幕臣の教育所になっていて、諸国から千人余の若者が集まり頭脳集結の場となっている。『和尚には許しを受けているが「そち」その昌平坂に学んでみぬか』と、殿からの言葉である。たった今まで最悪を考え、ひれ伏していた雲継、思わず半身を起こしたが、二、三寸程畳から宙に浮いているような気がする。矢継ぎ早に『るい、もう少し寄せぬか』と殿の催促に、るい姫、雲継と接近して座が並んだ、これは勿体なくも御前でこのようなことはあり得ないことで、次の事態は雲継が予測した、破門か、手討ちか、の、二つ以外の選択とは想像がつかない雲継、窮地この上ない。『そち達、阿弥陀様の前で将来を誓い合ったそうだが、間違いはないかのう、雲継殿』と言われ、今まで緊張の上の緊張で、目

前にある自分の手などは蒼白で、どのような咎めを受けようが微動だにせずと、十分な覚悟をしていたが。ここにきて、ドーと、いっきに額から汗が滴り落ちた、途端に雲継『ハハァー』とまた平伏してしまった。『分かった、気を楽しにして良いぞ「るい」長年の念願、^{かな}適えて良かったのう、あとは、和尚に任せた、良きにせよ』と襖の向こうに消えてしまった。るい殿が雲継の話を切り出したのはもうかれこれ四、五年前の事で善光寺の参拝を禁ずる、と、まで言われた、さすがるい殿、自分の想いをここまで貫き通したとは、余程の信念と、忍耐で説得しなければならなかったかは図り知れないものがあつたであろう。思えばるい姫との最初の出会いは雲継、確か八歳の頃であつた、自分の身の丈以上もある竹ぼうきで、^{けいだい}境内を掃除していた時、お屋敷からお参りがあつた、そんな時僧侶たちは一斉に一行の方に向いて合唱黙礼する習わしになっている、雲継も幼いが、そのような作法をして長く合掌します、所が、乳母に手を引かれた、るい姫が、雲継に駆け寄り、これから本殿で一緒にお参りしましょうと、無邪気なもので、雲継の袖を^{そで}引っ張り連れていくのである、雲継、片手に^{ぼうき}箒を持ったままついて行く姿が微笑ましくお屋敷の一行も、僧侶たちも和やかに見守っていた。

雲継の日々の信条で、『^{じん}仁』人々が寄り添って、^{うやまい}相手を敬い、そして思いやり、^{いつく}慈^{じんあい}しみの心を持つ『^{じん}仁愛』^{じんとお}仁遠からんや、^{われじん}我仁を欲すれば、^{ほつ}ここに^{じんいた}仁至る。

この物のとらえ方、考え方は、^{じうんしょうにん}和尚、慈雲上人からの教えの一つで、^{あつおんぎ}その厚い恩義に自分の生きざまを重ね合わせただけであると雲継は語っている。

るい姫と雲継の婚儀の話は、瞬く間に、関の街の人々に伝わった。

幼い頃からの二人を知る街の皆は、こぞって二人を祝福した。るい姫が、ついに長年の思いを貫いたことに、人々は深く心を打たれた。雲継に思いもよらぬ幸運の道が開けたことも、人々は自分の事のように喜んだ。「ほう……。これはきっとお寺の阿弥陀様の御利益ごりやくじゃ。」「姫様にあやかって、わしらも参ろうじゃないか。参って大きな願いを唱えようとな……。」「そうじゃ。わしらもこれからじゃ。」

この話は関の街中を元気にし、明るい希望を照らしていった。

この物語の時代は文化文政（1830）の後期の頃の設定であります、所謂化政文化いわゆるが栄えた一方、江戸幕府がこのころより徐々に衰退していく厳しい統制の時代に進んでいきます。時は移り平成 23 年、180 年近くの歳月が流れ、潮のごとくに繰り返す世相が、なぜかこの時代の今日、明日が酷似していることに歴史を感じるものであります。